

1. 題材名 ‘音楽のワザ’ を使って、『陽気な船長』のリズム伴奏をつくろう！
2. 題材の目標 くりかえしや変化などの音楽の仕組みを使ってリズム伴奏をつくる。
3. 学習指導要領の内容との関連

(1) 指導事項 A 表現 - (3) 音楽づくり

	ア いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること。
◎	イ 音を音楽に構成する過程を大切にしながら、音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくること。

(2) [共通事項] の主な内容

ア-(イ)	反復, 変化	リズムの繰り返しや変化
イ	音符や休符	四分音符 (及び四分休符) と八分音符の音価の違いや組み合わせ

4. 題材について

(1) 題材の構成

本題材では、これまでおこなってきた常時活動やリズムづくりの学習を活かし、思いや意図をもって音楽づくりをすることに重点をおいて展開する。具体的には、前半と後半の曲想の変化がある『陽気な船長』のリズムアンサンブル作りにとりくむ。ここで『陽気な船長』を扱ったのは、目的のない「音楽づくり」ではなく、「自分たちの作った伴奏とリコーダーを合わせて演奏する」というゴールを意識して音楽づくりにとりくんでほしいからである。

題材の構成は、はじめに既習曲『いろんな木の実』を、リズム伴奏のあるものとないものを聴き比べ、リズム伴奏の効果について感じ取る。

次に、個人で『陽気な船長』のリズム伴奏を作る。この活動では、1学期に学んだ音楽の仕組み(くり返し, 変化)を使い、さらに前半と後半の曲想の違いにも着目しながら、曲のイメージに合ったリズム伴奏を作る。ここでは、個人がそれぞれの思いや意図をもって、じっくり音楽づくりに向き合う時間としたい。

また、この過程の中では、3人組のグループで実際に演奏し合う時間を設ける。相手に演奏をしてもらうためには「演奏のしやすさ」という視点をもたなければならないため、リズムを簡素に作り直したり、くり返しを多くしたりするなどの工夫が必要になる。このような過程を経て、自分でも友だちでも演奏のできる、実際的な音楽づくりをめざしたい。

最後に『クラッピング ファンタジー 第7番』の鑑賞を通して、反復や変化、問いと答えとい

った音楽の仕組みが、実際の曲の中に活かされていることを理解し、音の重なりの面白さを味わう。これらの学習を通して、音楽づくりの面白さや自分の作った曲を演奏したり友だちと合わせたりする楽しさを十分味わうことができるよう、授業を展開したい。

(2) 本題材における児童の実態（4年1組 29名）

音楽への関心・意欲が高く、様々な活動に楽しんでとりくむことのできる学級である。

これまでの学習では、常時活動の中で「音価を意識したリズム遊び」や「2小節のリズムづくり」、「2種類～3種類のリズムを合わせて打つこと」などを行ってきた。これらの活動を通して、音符の長さや組み合わせ方を学習し、楽しみながら活動してきた。

また、1学期には「言葉を使ったリズムアンサンブルづくり」をおこない、「くり返し」「変化」「じゅんばんこ」「同時」を使って8小節2パートのリズムアンサンブルを作った。その際、音楽の仕組みを使おうとするあまり楽譜が複雑になってしまったり、小節線を気にせず、ただパズルのようにリズムをあてはめてしまったりするなどの課題が見られた。そこで、「くり返し」や「じゅんばんこ」を使うと、見た目にもすっきりして演奏もしやすいこと、また、できるだけ小節線をまたがないよう「4拍のまとまり」を意識すること、そして「かっこいい終わり方」にするにはどうすればよいかなどをもう一度確認し、自分の作品を手直した。

主教材となる「陽気な船長」はリコーダーの教材曲として1学期にとりくんだ。その際アとイのイメージを学級全体で共有し、同時に吹き方の工夫も考えてきた。技術面では足りないところはあるが、「こう吹きたい」という思いをもって演奏することができた。

5. 教材名及び教材選択の理由

(1) 陽気な船長 市川 都志春 作曲（音楽づくりの主教材として）

16小節のリコーダー曲で、前半の弾むリズムと後半のなめらかな旋律が対照的に構成されている。今回はその旋律の特徴を生かして、前半はウッドブロック、後半はトライアングルを基本にリズム伴奏をつくる。楽曲はすべて四分音符と二分音符で構成されており、子どもたちがリズム伴奏をつける際の手がかりとなりやすく、本題材に適していると考えられる。

(2) いろいろな木の実 西インド諸島民謡／加賀 清孝 編曲（比較聴取教材として）

ルンバのリズムに乗って歌とリズム伴奏を合わせる楽しさを味わうことができ、リズム伴奏の効果について感じ取るのにふさわしい教材である。リズム伴奏が入ることで曲全体のリズムが明確になり、合奏全体がより豊かになることを感じ取らせたい。

(3) クラッピング ファンタジー 第7番 長谷部 匡俊 作曲（鑑賞教材として）

2パートの手拍子と鍵盤ハーモニカで演奏される。手拍子のパートには、児童が今まで学んだリズムや音楽の仕組みがふんだんに使われている。音楽の仕組みを楽譜から視覚的にも理解でき、音の重なりの面白さを味わって鑑賞できる。以上の理由から、題材のまとめに適した教材であると考えた。

6. 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 音楽表現の技能	エ 鑑賞の能力
①リコーダーとリズム伴奏を合わせることに関心を持ち、意欲的に演奏している。 (第4時)	①『いろいろな木の実』の聴取から、リズム伴奏の演奏効果を感じ取っている。(第1時) ②曲想にあったリズム伴奏にするために、思いや意図をもっている。 (第3時)	①くり返しや変化など音楽の仕組みを使って、リズム伴奏を作っている。(第2時)	①楽曲に使われている音楽の仕組みを理解し、音の重なりを味わって聴いている。 (第5時)

7. 題材の指導と評価の計画 (全5時間)

時	◎ねらい ○学習内容 ・学習活動	◇ 指導上の留意点	評価規準 【評価方法】
1	◎リズム伴奏の演奏効果を感じ取り、音楽づくりへの意欲をもつ。		
	○ 『いろいろな木の実』を聴く。 ・ リズム伴奏があるものとないものを聴き比べ、その効果を感じ取る。 ○ 『陽気な船長』にリズム伴奏をつけることを知る。 ・ ウッドブロックとトライアングルの奏法と音色の違いを確認する。	◇ 楽曲を聴いたり、実際に歌ってみたりすることで、リズム伴奏の効果を体感させる。 ◇ 二つの楽器の音価の違いを感じ取り、楽器の特徴や曲想のイメージに合ったリズムづくりを意識させる。	イー① 【ワークシート】
2 (本時)	◎くり返しや変化などの「音楽の仕組み」を使って、リズム伴奏を作る。		
	○ 「音楽の仕組み」を生かして『陽気な船長』(前半)のリズム伴奏をつくる。 ・ 前時の学習を生かし、前半のリズム伴奏を作る。 ○ 友だちと交流し、演奏を試す。 ・ 実際に友だちに演奏してもらい、演奏しやすいかどうかを伝えあう。 ○ 次時への意欲をもつ。 ・ 演奏してみて難しかった部分や覚えにくい部分を意識し、次時の課題とする。	◇ 前半後半の曲想の違いに着目させ、曲奏に合ったリズムになるようにする。 ◇ 3人グループで活動させる。 ◇ どんなどころを、なぜ直したいと思ったか考えさせる。	ウー① 【ワークシート】

3	◎曲想にあったリズム伴奏にするために、工夫したり改善したりする。		
	○ 後半のリズム伴奏を完成させる。 <ul style="list-style-type: none"> 前時の学習を生かし、「友だちにも分かりやすく演奏しやすい」という視点をもって作る。 ○ 演奏ができるように楽器で練習する。 <ul style="list-style-type: none"> 自分の作ったリズム伴奏を練習したり、友だちに演奏してもらったりする。 	◇ 音を出して、試しながら作るように声をかける。 ◇ 前回の3人組で互いに演奏し合う時間も設ける。	イー② 【ワークシート】
4	◎自分の作ったリズム伴奏とリコーダーを合わせて演奏する。		
	○ リコーダーと合わせて演奏する。 <ul style="list-style-type: none"> 3人組になり、二人がリコーダー、ひとりがリズム伴奏を担当する。 3人分をすべて演奏しあい、感想を記入する。 ○ 全体で交流する。 <ul style="list-style-type: none"> みんなに紹介したいリズム伴奏をそれぞれのグループから発表する。 	◇ 「演奏のしやすさ」や「曲想に合っているか」といった観点をもたせ、みんなに紹介したい作品を一つ選ばせる。 ◇ みんなでリコーダーを吹きながら、代表のリズム伴奏と合わせて合奏させる。	アー① 【観察】
5	◎音楽の仕組みが様々な楽曲に使われていることを理解し、音の重なりを味わって聴く。		
	○ 『クラッピングファンタジー』を聴く。 <ul style="list-style-type: none"> どんな仕組みが使われているか注目して聴く。 ○ 楽譜から「音楽の仕組み」を読み取る。 <ul style="list-style-type: none"> 意見交換して確かめる。 ○ もう一度曲全体を味わって聴く。 <ul style="list-style-type: none"> 確かめたことが曲の中でどのように演奏されるか耳をすまして聴く。 	◇ 導入でリズム遊びをおこない、そこで復習したリズムが全て曲の中に使われることを知る。 ◇ くり返し、変化、同時、順番の既習事項をおさえる。 ◇ それぞれの音の重なり方の変化に注目させる。	エー① 【ワークシート】

8. 本時の展開（第2時）

(1) 日 時 平成29年 8月30日 14:00～14:45

(2) 場 所 加納岩小学校音楽室

(3) 本時のねらい

くり返しや変化など「音楽の仕組み」を使って、リズム伴奏を作る。

(4) 本時の評価規準

◇くり返しや変化など音楽の仕組みを使って、リズム伴奏を作っている。(音楽表現の技能①)

(5) 学習の展開 (5時間扱いの2時間目)

過程	学習内容と学習活動	◇指導上の留意点	準備物等
感じる (10)	1. 心と体をほぐし、授業を始める意欲をもつ。《常時活動》 ・ リズム遊びをする。 ・ 「陽気な船長」をリコーダーで吹く。	◇ リズム遊びを通して、♪と♩の組み合わせを意識させる。 ◇ ア、イの曲想の違いを意識させ、音楽づくりにつなぐ。	リズムカード
つかむ (5)	2. 前時の振り返り ・ リズム伴奏の効果について、前時の学習を振り返る。 3. 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">音楽のワザを使って「陽気な船長」のリズム伴奏をつくろう！</div>	◇ 前時の学習を振り返り、本時の見通しをもたせる。	
考える (10)	4. 「陽気な船長」のリズム伴奏を作る。 ・ 「くり返し」を基本に作る。 ・ 基本のリズムができたなら「変化」をどこか一か所入れてみる。	◇ まずは2小節を作り、2小節単位の繰り返しを捉えさせたい。 ◇ 楽曲のイメージに合ったリズム伴奏を意識させる。	ワークシート
深める (15)	5. グループで演奏し合う。 ・ 3人でお互いの作品を演奏し合う。 ・ それぞれの作品の良いところや難しかった所を交流する。	◇ 「陽気な船長」前半のイメージに合っているかを考えさせる。 ◇ 難しい所があれば、どうすればいいか話し合わせる。	
まとめ (5)	6. 代表児童の作品をみんなで演奏してみる。 ・ 良いところを見つけながらたたく。 7. 次時への見通しをもつ。 ・ 全体で確認したことを参考に、次回直したいと思うところをワークシートにメモする。	◇ 「いいな」と思われる作品はどんな特徴があるのかを意見交換させ、まとめていく。 ◇ よりよい作品になるような期待感をもたせ、完成に向けての意識を高めさせる。	

(6) 学習評価の進め方

◇くり返しや変化など音楽の仕組みを使って、リズム伴奏を作っている。(音楽表現の技能①)

○おおむね満足できる状況 (B) と判断できる児童

基本のリズムを選び、「くり返し」と「変化」を使ってリズム伴奏を作っている。

○十分に満足できる状況 (A) と判断できる児童

「くり返し」と「変化」を基本にリズム伴奏を作ることができ、さらに、曲想に合った自然なリズムや2小節のフレーズ感を意識した、まとまりのあるリズム伴奏を作っている。

○「努力を要する」状況と判断されそうな児童への対応

まずはリズムパターンの中から基本のリズムを一つ選び、そこから「くり返し」を基本に作るように助言する。また、指導者と共に演奏したり試したりしながら作る。

児童のふりかえりから

1. 前半と後半で、どのようなことに気をつけて作りましたか？

- ・ の方に長い音符を入れた。
- ・ は一つ一つ音をくぎるようにして、は音を長く作った。
- ・ リコーダーの演奏に合うようにした。
- ・ なるべく大きいまとまりを使うようにした。
- ・ はウン（休符）を入れた。はターアー（2分音符）を使った。
- ・ 後半はトライアングルでたたきやすいリズムにした。
- ・ は、と同じようにしないように注意した。
- ・ はのぼ～して、はのっばっさっなっいっ！

2. リズム伴奏とリコーダーを合わせてみてどうでしたか？

- ・ 楽しくておもしろかった。 ・ すごく楽しかったです。
- ・ ウルトラスーパーおもしろかったです。 ・ 楽器と組み合わせて、楽しかった。
- ・ いいかんじのえんそう～。 ・ すごくきれいだった。
- ・ ふつうにやるより、よいリズムだった。
- ・ すごくいい音楽になってうれしかったです。
- ・ きれいな音だった。初めてやったから楽しかった。
- ・ リコーダーだけよりもっと楽しくなるし、リコーダーだけよりきれいだった。
- ・ 緊張してうまくできなかったです。 ・ 意外によく合う！
- ・ 少しのリズムがむずかしくなってしまった。
- ・ すごく楽しかった。いろんな楽器の音がかみ合わさるときれいな音になる。
- ・ とってもリズムがよくて、おどりたくなった。
- ・ 曲に合っていた。 ・ うまくできた！ ・ リコーダーと合っていた。

3. 第5時『クラッピング・ファンタジー』の鑑賞をおえての感想

- ・ 「じゅんばん」や「同時」が使われているのですごく楽しくて、気持ち良かった。
- ・ 「どのリズムかな？」って探しながらかけたから楽しい。
- ・ 音楽のワザをプロの人も使っていたなんて、すごい、なんかうれしいです。
- ・ ぼくたちが習ったリズムなどを、一つの音楽にまとめられるのがすごいと思った。
- ・ 今まで習ったワザが使われていてビックリしました。
- ・ はじめにきいたときは分からなかったけど、がくふを見たらいろんなワザがあった。
- ・ がくふをみて、「なるほど～」と思った。 ・ すべてのワザが入っていてすごい。

《授業後の研究会より》

授業者反省

本時では「曲想をもとに思いや意図をもって作る」という面と「くり返しを基本に演奏しやすい作品を作る」という面での兼ね合いで、後者の方に比重が偏った。同様に「曲奏に合ったリズムを考える」という観点においても、指導が不十分であったと思う。

ただ本時においては、まずは自分でたたけること、そして第4時のグループ発表を見据えて他の人もたたきやすい（複雑すぎない）リズムであることが前提であると考えた。前半後半の曲想や、フレーズ感を意識したリズムづくりについて、次時につなげていきたい。

質問

- ・ 音符を書くことに慣れている様子だったが、今までの学習は。
- ・ 3人グループの作り方は。

成果

➤ 「わかった」「できた」を実感する授業の工夫

- ・ 学習環境が良かった。視覚的に分かりやすい掲示や板書、教具の工夫がされていた。
- ・ リズムカード…2拍の組み合わせで考えることで分かりやすく学習できた。
- ・ リズムに名前があることで、子どもが考えたり話し合ったりする手助けになっていた。
- ・ 常時活動の積み重ねが生きていた。（子どもの会話・演奏・記譜・系統性のある授業）
- ・ 導入から展開への学習のつながりが効果的だった。
- ・ 「くり返し」「変化」などの言葉が子どもたちから自然に出ており、前時までに獲得したものが本時に活かされていた。
- ・ 子どもから「もう終わり？」という声が出たように、テンポのよい授業だった。

➤ 聴き取る力・感じ取る力を高める学習活動

- ・ 自分で作ったリズムをたたいたり、友だちと交換したりする（演奏し合う）ことで、聴きながらの活動になった。
- ・ 常時活動の積み重ねにより、子どもに少しずつ少しずつのうちに力が付いている。
- ・ 机間指導で子どもの作品をたたいてあげることで、作品を客観的に聴くことができた。

➤ 思いや意図を伝えあう活動の充実

- ・ グループ活動の中で聴き合い、教え合う姿が見られた。また、グループ活動を通して自分の作品を作り直すなど、学びが深まっていた。
- ・ 子どもたちの人間関係や授業の雰囲気がいよこと、対話の深まりがあった。
- ・ 話し合いに手がかりがあったので、意図がぶれずにできた。

➤ 小中9年間を見通した授業づくり

- ・ 子どもたちは表情豊かで、音楽を楽しみ、身体も自然に動かしていた。授業の始まりから心と体がほぐれ、子どもたちがのびのび活動できた。
- ・ リズム遊び、読譜や記譜など、常時活動の積み重ねが大きな力になっている。
- ・ 子どもが理解しやすいような掲示物や教具の工夫がされていた。

課題

- ・ 曲想を生かして作るというよりは、簡単さ、演奏のしやすさを重視した音楽づくりになった。後半が「ゆるやかな感じ」になるとしたら、前半はある程度複雑なリズムの方が、対比が出るのではないかと。「音符が少ないからたたきやすい」「休符が多いから簡単だ」という意見が子どもから出たが、「大きなまとまり」や「2小節のフレーズ感」によって、まとまり感がでて演奏がしやすくなることを意識させたい。
- ・ 授業の途中で作品の紹介があると、さらに深まった。
- ・ グループの分け方に工夫があるとよい。(音楽的な力のある子を核として)

《考察 ～今後の授業に向けて～》

音楽の授業は週1～2時間と授業時数が限られている。その中で確実に力をつけるためには、やはり常時活動の充実が大きな力になると感じた。音楽に乗ってテンポや強弱を感じ取る活動、身体を動かしながら表現する活動、リズムづくりや言葉遊び、階名クイズや楽器の音当て、イントロクイズ、5分間鑑賞など、子どもたちがわくわくしながら活動を楽しみ、それでいて音楽の力になるような活動をこれからも続けていきたい。

特に「音楽づくり」・「創作」の分野は、そういった日頃の小さな積み重ねが活きる場である。逆にいうと、読譜や記譜、リズムの組み合わせや音価が理解できていない子どもたちにとっては、ハードルが高く「よく分からない」、「難しい」活動になってしまう。

今回授業をしてみて、常時活動の積み重ねが創作活動の手助けになり、子どもたちが難しさを感じることなく作曲できたこと、また、ほぼ全員の子供たちが「楽しかった」という感想をもち、みんなで合奏できたことは、とても大きな成果だった。

同時に、思いや意図をどのように作品に反映させるか、またそれをどのように見とるのかという難しさも感じた。全員が「できる」やり方を指導することと、子どもの自由な発想を活かすことの兼ね合いを見極めながらとりくむ必要がある。